

小学校、中学校における書く力の再考（第1年次）

— 他教科や生活への活用を目指して —

研究代表 東京学芸大学国語教育講座 大熊 徹
附属小金井小学校 細川 太輔

目 次

1. はじめに（附属小金井小 細川太輔）	54
1. 1. 研究目的	54
1. 2. 研究の進め方	54
2. 研究の内容（附属小金井小 細川太輔）	55
2. 1. 書くことの指導における課題	55
2. 1. 1. 調査の概要	55
2. 1. 2. 調査の結果	55
2. 2. 検証授業（附属世田谷小 井上陽童）	56
2. 2. 1. 検証授業の構想	56
2. 2. 2. 単元に対する考え方	56
2. 2. 3. 単元の目標	56
2. 2. 4. 単元の評価規準	57
2. 2. 5. 研究の視点	57
2. 2. 6. 学習指導計画	58
2. 2. 7. 本時の展開	58
2. 2. 8. 検証授業の成果と課題	59
2. 2. 9. 児童の作品と感想	59
3. 今年度の成果と課題（東京学芸大学 大熊徹）	60
3. 1. 成果	60
3. 2. 課題	60

小学校、中学校における書く力の再考（第1年次）

— 他教科や生活への活用を目指して —

研究代表 東京学芸大学国語教育講座 大熊 徹 附属小金井小学校 細川 太輔

研究同人 大熊徹・千田洋幸・中村和弘・廣川加代子（東京学芸大学）／木下ひさし（宮城教育大）／笠井正信（中央大学）／上田真也・古谷理恵（附属竹早小）／井上陽童・福田淳佑（附属世田谷小）／青山尚司・小倉勝登・大塚健太郎・成家雅史・細川太輔・三浦尚介・吉永安里（附属小金井小）／宮寄佐智子・岩浅健介（附属大泉小）／森顕子（附属竹早中）／渡邊裕（附属世田谷中）／石井健介・田中成行・松原洋子（附属小金井中）／荻野聡（附属国際中等）／片山守道（お茶の水女子大附属小）／奥村千絵（横浜国立大学附属横浜小）／浅見優子・油史枝・生島靖裕・伊澤圭花・石川尚樹・薄井智美・笥理紗子・川畑秀成・窪田雅美・小林真理子・坂本喜代子・三枝美枝・高桑美幸・高瀬誠哉・武井二郎・藤村由紀子・松江宣彦・松村優子・矢作朋子（東京都教員）／金野泰久（埼玉県教員）／小山進治（横浜市教員）／小川明夫（神奈川県養護学校教員）／大川修一（千葉県教員）／新井孝昇（愛知県教員）／赤井聡子・梅田芳樹・星野真奈美・諸戸香織・佐藤恵子・山本大輝（私立小学校教員）／高橋麻樹子（私立中学校教員）／南館伸介（教育出版）／松田昌幸・笹平真之介（東京学芸大学大学院生）

1. はじめに

1. 1. 研究目的

小学校学習指導要領第1章総説に「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。」とある。つまり、言語活動を充実させ、思考力、判断力、表現力をはぐくむことが今求められている。

ここでは特にその言語活動の中で、書く力に焦点をあてる。書く力は表現する力、論理的思考力として、国語科だけでなく、他教科や日常生活に活用される力としてとても重要な力である。しかし学生から書くことの指導を卒業論文まできちんと受けてこなかったという声を多く聞く。もう一度基礎に立ち返り、小学校・中学校で必要な書く力、書くために必要な力は何かを検討することが急務であると考えている。真に必要な書く力を再定義し、そのための授業づくりを行い、提案していくことを目的としている。

1. 2. 研究の進め方

第1年次には小学校・中学校において必要な書く力を探るため教師の意識調査を行う。また先行研究から必要な書く力を育てる指導を定め、検証授業を行う。第2年次は言語技術だけではなく、他教科や生活へ活用される力が身につく実践を検討し、幅広く実践する。第3年次 求められる書く力や授業実践を冊子にまとめて発表し外部評価を受けることを考えている。

2. 研究の内容

2. 1. 書くことの指導における課題

2. 1. 1. 調査の概要

1962年に倉澤は書くことの課題を教師の意識調査を行ったⁱ。その結果、総計で順位付けると

①書けない子の指導をどうするか、②評価の基準をどのように決めるか、③表記法の正しい理解活用のための作文学習、④作品処理をどのようにして行うか、⑤生活綴り方運動の推進または批判の5つになると言う。当時と現在で国語科教育の置かれている状況が異なるため、少し文言を変え、以下のような質問紙で調査を行った。

1位	2位	3位	4位	5位

作文指導上の課題についてのアンケート

お忙しいところ大変申し訳ありません。私は東京学芸大学附属小金井小学校の細川太輔と申します。この度は東京学芸大学教授大熊徹先生のご指導をいただきながら、作文指導上の課題を見つけ、作文指導の新しい方向性を考えるためにプロジェクトを立ち上げました。先生方が作文指導上で課題と考えていらっしゃることを半直に教えてくださると幸いです。また何かありましたら遠慮なく taisuke@u-wakugei.ac.jp にご連絡ください。よろしくお願ひ申し上げます。

1. 先生について教えてください。
教職 () 年 勤務校 (小・中・高) 専門教科 (国語・国語以外・特にない)

2. 作文教育において大事だと思われることを5つだけ選んで、1、2、3、4、5の順にお答えください。

ア 書けない子の指導をどうするか	キ ノート指導
イ 1年生の入門期の指導	ク 文字・表記の正しい理解のための作文学習
ウ 作品の評価をどのようにして行うか	ケ 文集づくり
エ 物語・随筆の創作指導	コ 報告文、記録文、意見文などの指導
オ 詩や短歌、俳句の創作指導	サ 依頼状、案内状、礼状などの手紙の指導
カ 日記指導の方法	

3. 作文指導上、特に先生が重要だと考えて実践していらっしゃることを4段階で教えてください。

①子どもを作文好きにする指導
(4.必ず指導する 3.よく指導する 2.時々指導する 1.ほとんど指導しない)

②案まめにする指導
(4.必ず指導する 3.よく指導する 2.時々指導する 1.ほとんど指導しない)

③子どもの作文に対する技能について

- 取材指導 (4.必ず指導する 3.よく指導する 2.時々指導する 1.ほとんど指導しない)
- 構成指導 (4.必ず指導する 3.よく指導する 2.時々指導する 1.ほとんど指導しない)
- 記述指導 (4.必ず指導する 3.よく指導する 2.時々指導する 1.ほとんど指導しない)
- 推敲指導 (4.必ず指導する 3.よく指導する 2.時々指導する 1.ほとんど指導しない)

4. 作文の授業の準備について先生がしていらっしゃることを教えてください。

- 子どもが書きたくなるよう単元の構成を工夫する。(4.必ずする 3.よくする 2.時々する 1.ほとんどしない)
- ワークシートを作る。(4.必ずする 3.よくする 2.時々する 1.ほとんどしない)
- 例文を自分で書く。(4.必ずする 3.よくする 2.時々する 1.ほとんどしない)

アンケートはこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。

2. 1. 2. 調査の結果

東京都の教員56名から返答があった。その結果総計で表すと①書けない子の指導をどうするか②入門期の指導③文字・表記の正しい理解のための作文学習④作品の評価をどのようにして行うか⑤日記指導の方法、という結果になった。つまり書けない子への指導という課題は不変である、また文字・表記の問題、作品の評価という課題は書くことの指導としても残っており、現在もそれが解消されていないことが分かる。

調査の後半で教師が重要だと意識して指導しているもので、数値が高いものを挙げると、構成の指導、記述の指導、正しい文字・表記の方法が高くなっており、書く技能を身につけさせようという指導は多く行われている。しかし、数値が低いところを見ると、書くのを好きにさせる指導、筆まめにする指導、認識力・判断力を育てる指導が行われておらず、書く意欲、書く習慣づけや、認識力・判断力を育てようという指導があまり行われていないことがわかる。この部分は大熊が書くことの3層構造の中で、特に深層の力として挙げているⁱⁱところだが、その深層を育てる指導があまりなされていないことが分かる。書けない子に書く技能だけ与えても書くこ

とが嫌いになり、書く習慣が身に付かない、言葉を紡ぎだす認識力・判断力が育たなければ実生活や他教科に生きる書く力にはならない。大熊の言う深層の力を育てる指導を行っていく必要がある。

(附属小金井小 細川太輔)

2. 2. 検証授業 (附属世田谷小 井上 陽童)

以上のような課題をふまえ、検証授業を12月2日に行った。

2. 2. 1 検証授業の構想

(1) 単元名 「なぞときしょうたいじょう」をかこう

—せたがやしょうがっこう ぼく・わたしのおきにいりの〇〇—

(2) 対象 東京学芸大学附属世田谷小学校 第1学年3組39名

(3) 授業者 井上陽童

2. 2. 2. 単元に対する考え方

本単元の特徴は、大きく3つある。特徴の第1は、「子どもの思いと共に、深化・発展する学習活動」である。「学校のことをもっと知りたい！」という子どもからの声で、1学期中に2回2学期の10月に2回、学校探検を行った。そして、4回の学校探検が終わったところで「この活動のゴールをどうするか？」と子どもたちに投げかけたところ、「学校のことを知らない人に教えたい。」「知っている人に、クイズを出したい。」「忘れないように、書いて残したい。」という意見が出た。このように、子どもの願いを出発点にして活動を積み重ねていくことで、その願いが「知りたい」から「教えたい」へと変化し、そこから学びが生まれさらに深まっていったのである。

特徴の第2は、「必要感のある書く活動」である。学校探検をして学校のことを知り、それを学校のことを知らない誰かに教えるとなったとき、その相手の手を引いて自分が紹介したい場所へ案内すれば目的は達する。しかし、「教え方を工夫して相手を喜ばせよう！」と投げかけたとき、子どもたちから「自分が紹介したい場所に関するクイズを出すことで、相手に学校探検をさせたい。」というアイデアが出てきた。そこで、授業者が書いた“なぞとき招待状”をもとに、授業者のお気に入りの場所を子どもたちが当てるという活動を行ったところ、「私達もその“なぞとき招待状”を書いて、お気に入りの場所を当ててもらいたい！」という声が一気に上がった。そしてその後の話し合いで最終的に、「お家の人に“なぞとき招待状”を送って、世田谷小学校を探検してもらおう」という流れになった。ここで大切なのは、「学校のことを誰かに教えたい」という目的意識・相手意識はもちろんだが、「相手を喜ばせたい」「おもしろくしたい」という子どもの願いである。その願いを引き出すことで、書く活動の必然性や意欲が生まれ、それ以降の学習を行う原動力となった。

特徴の第3は、「自分の足で確かめる自己評価・相互評価」である。紹介したい場所（今後は「お気に入りの場所」とする）のよさが表れているか、相手が本当にお気に入りの場所に行けるのか、など、自分の書いた文章を読んで自己評価し、必要があればさらに取材し直して文章に活かす。また、自分の書いた文章をクラスの友達に読んでもらい、その友達が実際にそのお気に入りの場所に行けるか、その場所のよさが伝わるかを吟味してもらう。この2つの活動を行うためには、どちらも書かれた文章を読んで実際にその場所に行く必要がある。この実感を持った自己評価・相互評価が、低学年の書く活動においては最も重要なことと考える。

2. 2. 3. 単元の目標

○学校探検を通して自分のお気に入りの場所を見つけ、お家の人や自分のお世話になった人にその場所を紹介したいという意欲をもつ。

- なぞとき招待状を書くために、自分の様々な感覚を使って、お気に入りの場所に関する事柄を集める。
- 自分のお気に入りの場所のよさが表れているか、相手が本当にその場所に行けるのかなど、自分の書いた文章を読んで自己評価し、必要があればさらに取材し直して文章に生かす。

2. 2. 4. 単元の評価規準

- ◎お世話になった人に“なぞとき招待状”を書いて学校探検をしてもらい、自分のお気に入りの場所を知ってもらったり、喜んでもらったりしたい、という意欲をもつ。 (関心・意欲・態度)
- ◎学校探検をもとに、自分のお気に入りの場所を決め、体の様々な感覚を使ってその場所について紹介したい事柄を集めている。 (取材・・・書くことア)
- ・始め「前置き」と中「その場所のよいところと行き方」と終わり「誘いかけの文」の構成を意識して書いている。 (構成・・・書くことイ)
- ・お気に入りの場所のよいところやその場所が伝わるように、一文の意味を明確にして書いている。 (記述・・・書くことウ)
- ◎実際にお気に入りの場所に行って、その場所のよいところや行き方が伝わるかを確認しながら文章を読み返し、必要があれば書き直したり書き加えたりしている。 (推敲・・・書くことエ)
- ・お互いの“なぞとき招待状”を読んで、実際にその場所に行って、お客さんの気持ちになってその場所のよさを味わい、感想を伝え合っている。 (交流・・・書くことオ)
- ・助詞の「は」「へ」「を」を文の中で正しく使っている。 (言語についての知識・理解・技能)

2. 2. 5. 研究の視点

(1) 視点1 指導と評価の一体化

- 実の場における活用による実感としての自己評価
“なぞとき招待状”をお家の人などに読んでもらい、学校探検を楽しんでもらうことで、書くことの成就感を味わわせる。
- 自分の足で確かめる自己評価・相互評価
お客さんになったつもりでお互いの文章を読んで実際に学校探検をし、お気に入りの場所への行き方やそのよさが伝わる内容になっているかを伝え合う活動を設定する。
- 教師による評価と支援
具体的な評価規準A・Bを設定し、それに対する学びの姿と支援を明確にして、本時の授業に活かす。また、一単位時間ごとに、児童が記述したものや学習感想を読んで、記述内容や学習態度を評価し、励ましや賞賛の言葉を入れながら、次時のめあてを明確にもたせる。授業の最初に児童の作品を紹介し、よいところを共有してから書かせるようにする。

(2) 視点2 単元展開の工夫

- 0次の学習「総合学習の学校探検」
本校では、低学年の2年間は教科の枠を設けない総合学習の形をとっている。本単元は、その学習の一環である「学校探検」から始まっている。そして、子どもの願いが「学校のことを知りたい」から、「知ったことを誰かに教えたい。」と変化し始めた頃を見計らって、国語科的内容の「書くこと」を生かした学習を行った。
- 一単位時間の導入の工夫
前時までに書いた児童の文章を本時の導入で紹介し、書きぶりのよいところを見つけ本時のめあてへとつなげる。

○実の場における活用

1. お家の人に“なぞとき招待状”を渡して学校探検をしてもらう。2. 一緒にその場所を回る。3. お家の人が書いた手紙を読む。以上の3つの活動を通して、お家の人の喜ぶ姿を見たり感想をもらったりすることで、「書いてよかったな。」「また書きたいな。」という実感をもたせる。

(3) 視点3 学習材・言語活動の工夫

○取材の積み重ね

「学校のことをもっと知りたい」という思いで行った取材Ⅰと「お気に入りの場所についてもっと知りたい」という思いで行った取材Ⅱ。これらの記録を1つのファイルにまとめ、“なぞとき招待状”を書くときの資料や、単元のふりかえりに活用させる。

○取材メモの工夫

普段の学習から使っている『目』『耳』『鼻』など情報を受け取る部分をマークにしたものをワークシートに入れて、それらの感覚を最大限に生かして取材をするよう声かけをした。

○例文の活用

「お気に入りの場所を、どのように工夫して紹介するか」という話し合いにおいて、教師が書いた“なぞとき招待状”を例文として提示した。これによって、子どもたちは“なぞとき招待状”を送って相手に楽しく学校探検をしてもらう、というイメージを明確にもった。またその例文から、“なぞとき招待状”にどんなヒントがあるとよいかを考えさせていった。

2. 2. 6. 学習指導計画（全9時間）

0次 学校探検を行い、お気に入りの場所をそれぞれ見つける。

1次 単元末の活動について話し合い、実際に教師の書いた例文で「なぞとき学校探検」を行うことで、今後の学習の見通しをもつ。（2時間）

2次 取材をして、「なぞとき招待状」を書く。（6時間）

活用 お家の人（2年生）に招待状を渡し、「なぞとき学校探検」を行ってもらう。（1時間）

2. 2. 7. 本時の展開（本時 6 / 9時間）

<目標>

○友達の招待状を読んで実際にその場所に行った上で、招待状の内容がその場所への行き方やそのよさを伝えるものになっているかを考え、自分の感想を書き手に伝えている。

○友達からの感想や自分のふり返りを活かして、自分の下書きをさらによいものになるよう書き加えたり書き直したりしている。

学習活動	◇支援と☆評価（評価方法）
①本時の流れを確認する。 ②2人1組となって、お互いの「なぞとき招待状」を読んで、「なぞとき学校探検」のお試しをする。 ③お試しをしてみて、相手の文章のよいところやさらに工夫できるところを伝え合う。	◇教師の例文をもとに行った「なぞとき学校探検」を想起させる。 ◇お互いの長所・短所が補完し合えるようなペアを組む。 ☆友達のよいところやさらに工夫できるところを赤で書いている。（下書き用紙）

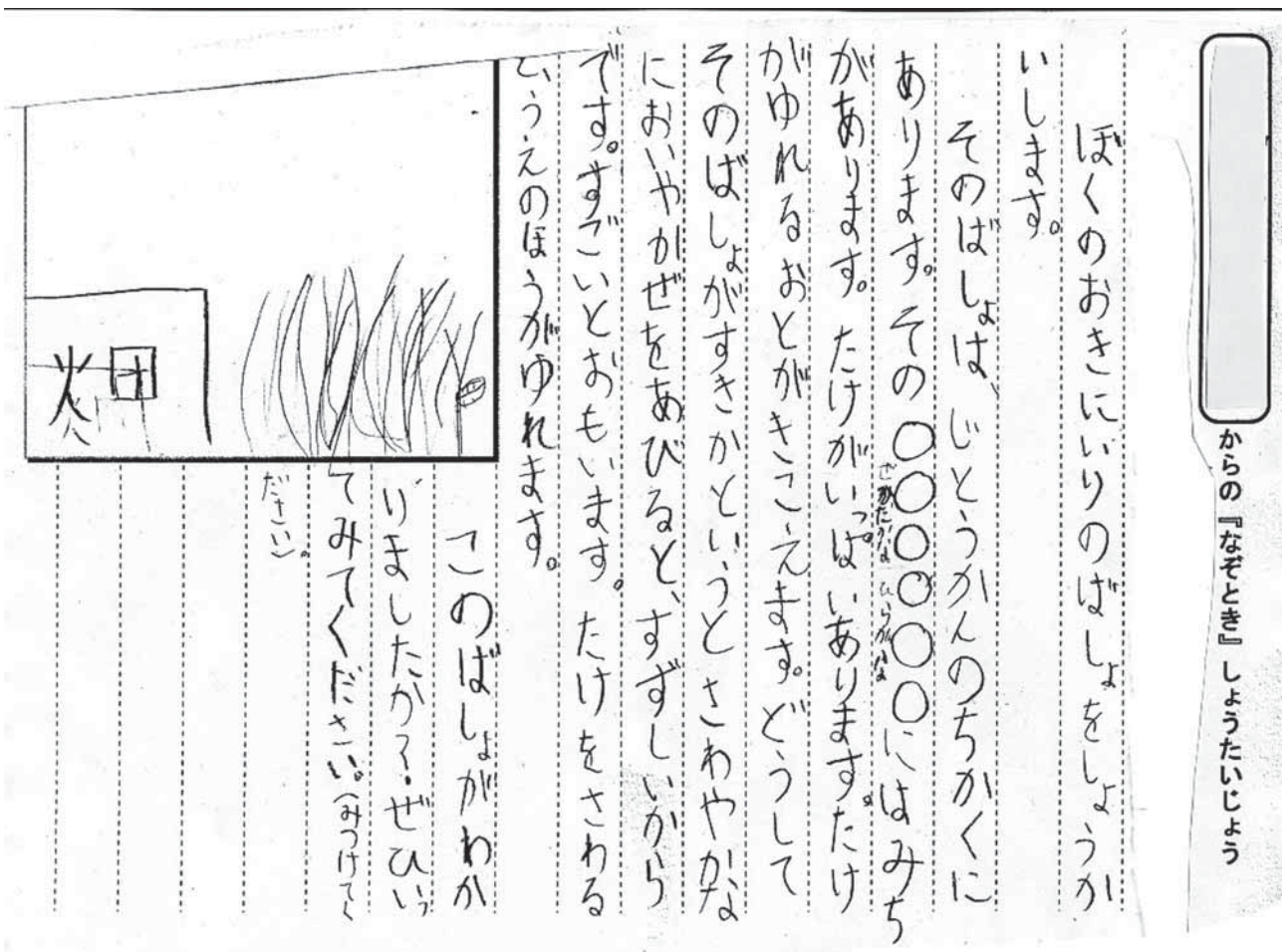
2. 2. 8. 検証授業の成果と課題

○協議会では、低学年の交流の範囲を超えている、というご指摘をいただいた。しかし、本時で行ったような「足で確かめる自己評価・相互評価」であれば、たとえ1年生であっても書かれている内容の吟味することは可能だと今でも考えている。本時で問題だったのは、その内容を吟味する上での手立てが不明確だったことである。相手のお気に入りの場所にたどり着けなかったときは、それまでに蓄積している取材メモに戻らせて、その中から「決め手となるヒント」を見つけさせるべきであった。また、内容の吟味が「行き方」と「その場所のよさ」という風に2点あったが、「行き方」の吟味に絞るべきであった。

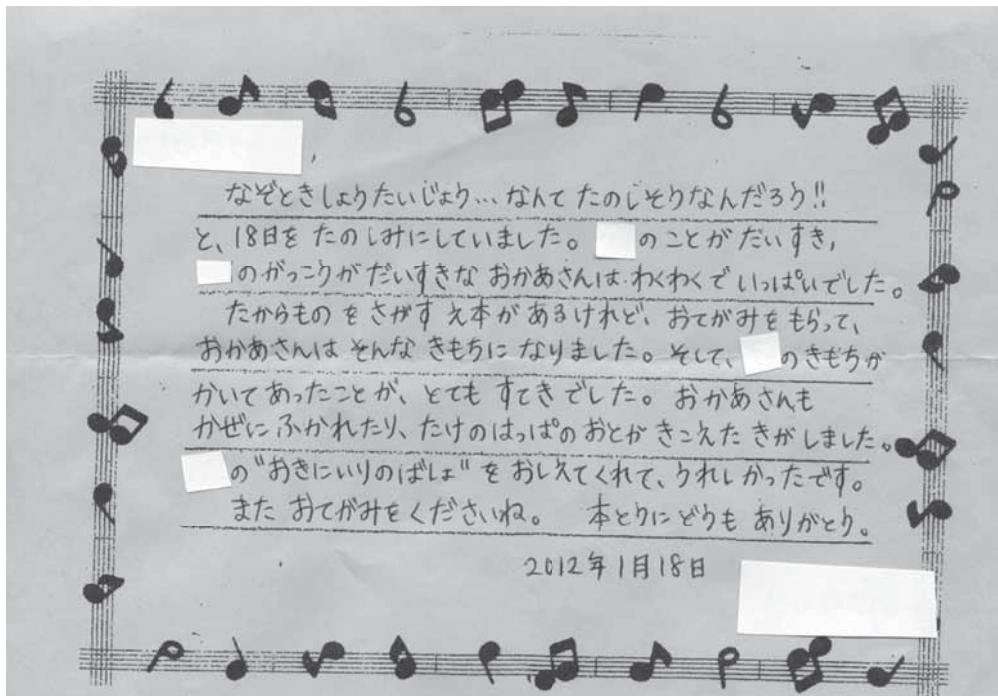
○最終的に、単元末は2回の「なぞとき学校探検」を行った。1回目がお相手さんである2年生と、2回目保護者とである。その結果、どちらの時も相手からお礼のお手紙をいただくことができた。手紙を読むとき子どもたちは、うれしくてたまらないという様子であった。以下に載せておいたまとめの学習感想からもそれがうかがえる。「書いてよかった!」「また、書いてみたいな。」という実感としての自己評価を得たことは間違いないだろう。今後も、今回のような子どもたちがワクワクする単元を子どもと共に創っていきたい。

2. 2. 9. 児童の作品と感想

①なぞとき招待状「保護者宛て」



②保護者の感想



③本単元を終えての学習感想

- ・「なぞとき招待状」の勉強は、11 / 7から始めて、「やっぱり最初から時間をかけてやるのかな。楽しみ。ワクワク。」と思っていたら、本当にそうなったからよかったです。
- ・「なぞとき招待状」が楽しくて、もう50回くらいやりたいです。完成してよかったです。
- ・お手紙をお母さんからもらって、とってもうれしかったです。やっぱり、なぞとき招待状をやってよかったなあ。」と思いました。お母さんにありがとう、です。

3. 今年度の成果と課題（東京学芸大学 大熊徹）

3. 1. 成果

- 倉澤の研究からも言われているように、作文を書けない児童にどう指導するかが作文教育の課題となることが明らかになった。これは作文教育の実践があまり変容していないということの裏返しと見ることもできる。
- 井上教諭の実践から、児童が楽しみながら書くこと、書くのが好きになる活動とはどのようなものなのかがはっきりとわかった。児童の意識を0次で醸成し、実の場における活用で目的意識、相手意識を明確にしていくことが児童の意欲を育てることになる。

3. 2. 課題

今年度の研究実践は1つだけである。来年度はいろいろな学年、文種で児童が書きたくなる実践を研究開発していきたいと考えている。

i 倉澤栄吉『作文教育の体系』（金子書房 1952）p.12-13

ii 大熊徹『朝の10分間ミニ作文』（明治図書 2006）p.110.111